

SDGs スタートアップ研究分科会
アドバンスコース第2回情報交換会実施報告

2019年10月8日
PMI 日本支部 組織拡大委員会
SDGs スタートアップ研究分科会
アドバンスコース・リーダー 高橋 正憲

去る9月18日(金)、SDGs スタートアップ研究分科会のアドバンスコース第2回情報交換会を開催しましたのでご報告いたします。

アジェンダは次の通りです。

1. SDGs スタートアップ研究分科会の経過報告
2. 参加団体情報交換
3. SDGs 最新動向（評価システムの構想）

各項目の概要をお伝えします。

1. SDGs スタートアップ研究分科会の経過報告

a. 9月2日内閣府 SDGs プラットフォーム総会にて当分科会の活動を紹介

午前は総会及び関連講演、午後はマッチングイベント、分科会活動紹介でした。当分科会は午後の39団体によるセッションのトップバッターで、37名の参加を得て活動の概要を説明したのち、短時間でしたがSDGs事業推進の課題について参加者とディスカッションをしました。

その結果、これまでに参加した複数の分科会や昨年私たちが主宰した「SDGs スタートアップ研究分科会」の参加者が指摘している次のような点が共通の課題であるということが分かりました。

1. トップの支援
2. 具体的な目標の設定
3. 実行するためのリソースの確保
4. 関連部門の協力
5. 連携組織との合意形成

これらの課題については、さらに広く調査をして解決策を検討していきたいと思っております。

昼休みには参加 25 団体の PR 動画が放映されました。こちらも当分科会がトップで、他の分科会が単なる PR 動画を流しているのに比べて、短時間ながら分科会の目標と内容をしっかり伝えて大変インパクトがありました。

オフィシャルな総会開催報告は次のサイトにありますのでご覧ください。

<https://future-city.go.jp/platform/information/event2020e.html>

この総会の後、次項のベーシックコースに複数の参加申し込みをいただいています。

b. 10月23日ベーシックコース・キックオフ開催案内

本年度のベーシックコースの参加者募集はすでに始まっています。

SDGs への共感と理解が広まり、企業・行政・NPO・教育機関が SDGs への取り組みを開始するケースが増えていますが、いざ SDGs を事業として開始しようとしても、中々立ち上がらない、または効果的に推進されていないという状況が多くみられます。(図 2)

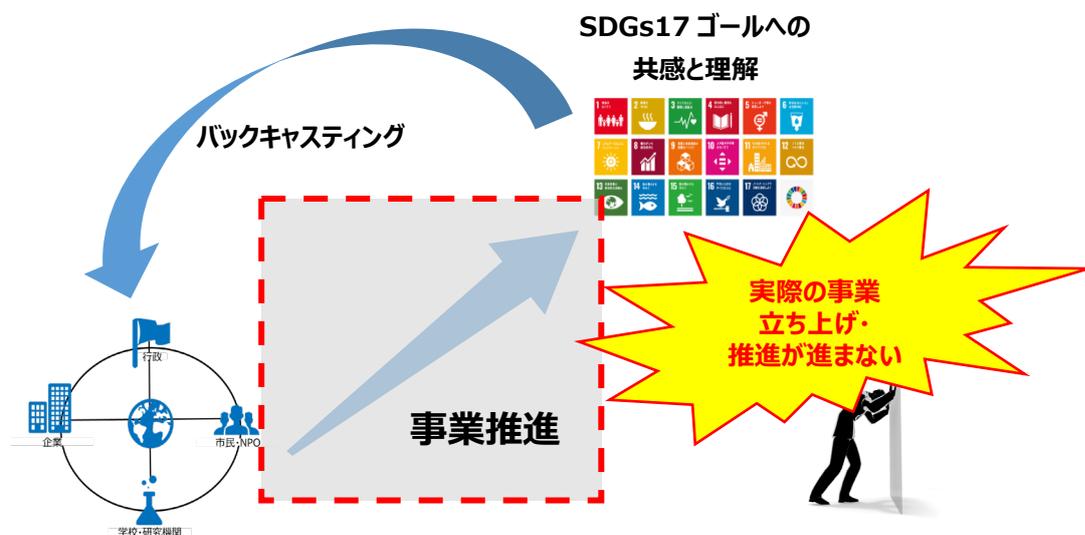


図 2 バックキャストिंगから事業推進の難しさ

ベーシックコース・キックオフのご案内は次をご参照ください。

https://www.pmi-japan.org/news/info/2020_07_30_sdgs20200803.php

2. 参加団体情報交換

現在アドバンスコースに参加されているのは3団体です。

a. **舞鶴工業高等専門学校（小規模河川の浸水予測プログラム）**

（報告：舞鶴工業高等専門学校 校長 内海康雄氏）

舞鶴市では、近年小規模河川の氾濫により道路の冠水、住宅の浸水被害が多発しています。その対応策として、降水量と河川水位の関係を解明して数時間後の水位予測・浸水危険度情報を配信するシステムの構築に取り組んでいます。

これまでに舞鶴市志楽川に水位計を設置して計測を始めており、今後ドローン測量により地形や河川構造物の影響を検討するとともに、氾濫解析ソフトウェアを利用して予測を行います。

地域ニーズに基づく SDGs 達成に向けたプログラムで、市民—自治体—高専の協働によって舞鶴市の防災まちづくりを目指します。

パートナー企業と検討・協業を推進していますが、今後の拡張のための資金調達が課題です。

b. **株式会社カルティブ（企業版ふるさと納税プラットフォームプログラム）**

（報告：株式会社カルティブ 企業版ふるさと納税コンサルタント 小坪拓也氏）

本年4月に大幅に税制改正された「企業版ふるさと納税」制度の解説や申請手続きを、100本を超えるYouTube動画と毎週のセミナーで啓発しています。全国4地域に展開した支社の営業活動により、現在までに自治体の契約プロジェクト20件以上、提供するソリューション・サービス30件以上にのぼっています。

SDGs スタートアップのロジックモデルからまとめられたWBSと実体の活動内容との整合を図るため月1回グループ各社が集まって戦略検討会を行っています。

これからの課題は良好な事例づくりと社会的インパクト評価手法の検討です。

c. **日本プロジェクトマネジメント協会（PMAJ）（プロジェクト検討中）**

（報告：PMAJ 理事 三浦進氏、SDGs スタートアップ研究分科会 西原真仁）

対象とするプロジェクトを検討している過程で以下の関連活動があります。

・9月11日PMシンポジウム（PMAJ主催）へのオンデマンド出演

（講演：SDGs スタートアップ研究分科会 西原真仁、稲葉涼太）

PMAJも参加した昨年度のSDGs スタートアップ研究分科会の内容を振り返り、SDGs 事業立ち上げに有効なプロジェクトマネジメント手法と今後の展望について紹介しました。

基調講演、特別講演においても、SDGs 的な取り組みに関する発表が行われており、SDGs 事業への関心は高いと思われます。

・今後の活動見通し

上記シンポジウムでの SDGs 関連講演に対する聴衆の反響を確認し、今年度の PMAJ での SDGs に関する取り組み実施可否を判断した上で、セミナー開催や法人会員向け勉強会開催といった具体的な活動に着手していきたいと考えています。

3. SDGs 最新動向（評価システムの構想）

この情報交換会では、毎回その時点での SDGs に関する新しい動きをお伝えしようと思います。前回はいま話題になっている ESG 投資について実際の取り組みにおける二つの課題を検討しました。

それらを含めてスタートアップの段階から SDGs 事業の実践段階に進んだとき、図 1 のようにマネジメント・サイクルを回していくためには各ステップの評価システムが必要になります。

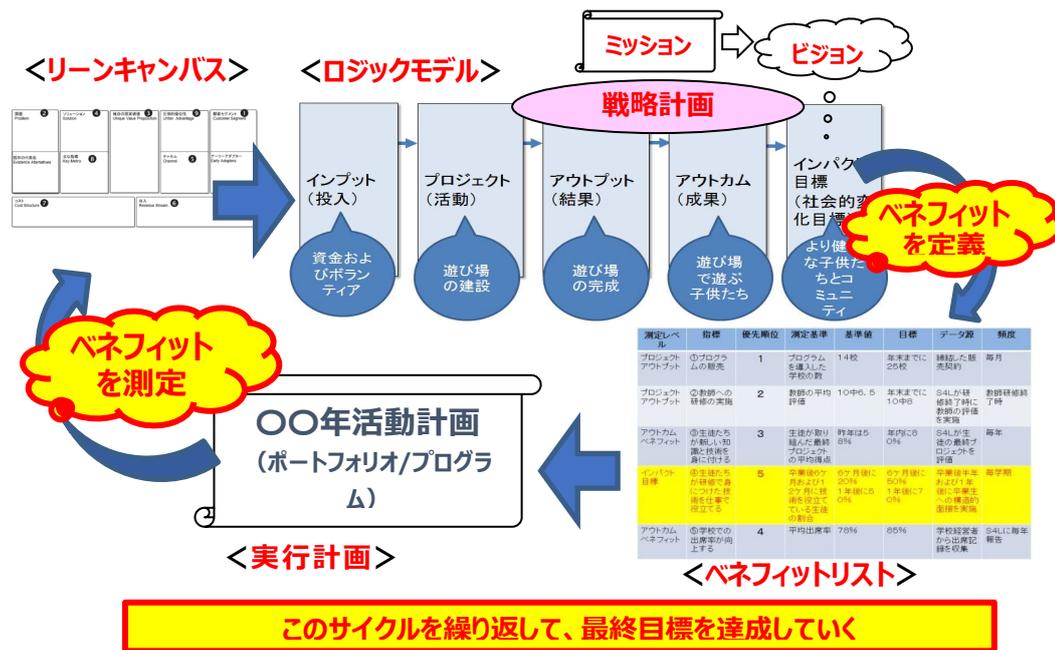


図 1 SDGs マネジメント・サイクル

詳細な内容は今後アドバンスコース参加団体の事例を含めて検討していきますが、ここでは図 2 SDGs スタートアップ適用モデルの各ステップにおける評価のポイントだけご紹介します。

ここでのポイントは、短中長期の状態として取り込みたいワードを精査してタイミングの適時性を確認することです。

展開されたキーワードのうち、長期に当たるものから、この事業の目的と最終目標の状態を成文化してミッションとビジョンにまとめます。

d. **ロジックモデルにおける評価**

まずビジョンからバックキャストで長期アウトカム、中期アウトカムまで論理的に展開します。ここでのポイントは、顧客グループ、ソリューション要素など、活動領域と合わせて展開するとこの後で活動からの流れと繋げやすくなります。

次に活動のアウトプットから創出される短期アウトカム、中期アウトカムをターゲット設定で展開されたキーワードを用いて構成します。このとき、前段でビジョンから展開した中期アウトカムと整合するかがポイントです。上流の各活動から最終ビジョンまでの因果関係が適切かどうか（重複がないか抜けがないか）を評価します。

e. **ベネフィットリストにおける評価**

ここで行うのが、事業の最終目標としての評価です。

活動内容ごとの主要な受益者を決定し、受益者の視点でベネフィットリストを定義します。関連するステークホルダーと協議して、そのベネフィットを評価するのに適切な指標と目標値を設定し、測定方法を決定します。

上記 a~e の適用モデル各ステップの評価を図 2 のスタートアップ・プロセスのどのタイミングで行うかを考えてみます。

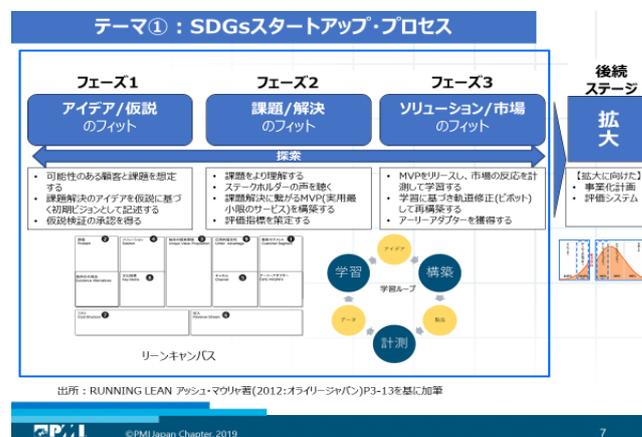


図 3 SDGs スタートアップのプロセス

SDGs 事業開始時点の初期状態（方針確定や関係者の情報共有の進展度合いなど）によって異なりますが、ここではほぼ白紙の状態から比較的余裕のあるサイクルで進むモデルを想定して考えましょう。各フェーズの期間は2～3か月とします。現実には戦略としてもっと速いスピードで立ち上げることや、組織風土の醸成に合わせて創発的な進行を図るために時間をかけるなど、状況に応じて決定します。

①フェーズ1における評価

準備が出来ていない状態では、まずコアメンバーが机上でリーンキャンバスのたたき台を作成します。それに基づいて組織内のステークホルダーの意見を収集し、リーンキャンバス Ver.1 を完成させます。この段階では主要指標は仮設定であり、この後仮説検証をすすめることにトップの承認と関係者の賛同を得ることがポイントです。

②フェーズ2における評価

リーンキャンバス Ver.1 に基づいて関係者とともにターゲット設定、ロジックモデルのたたき台を作り、内外のイノベーターのインタビューによってブラッシュアップします。ここでイノベーターとは、新規事業に敏感な見込み客や、この領域の有識者、ソリューションについての専門家などを指します。この過程でリーンキャンバスも修正がかけられ Ver.2 とします。必要があればこの後のテストまたはデモのために MVP (Minimum Viable Product : 実用最小限の製品) を構成します。

③フェーズ3における評価

MVP をリリースして市場の反応を見て学習し、必要であれば軌道修正（ピボット）してモデルを再構築し Ver.3 とします。市場の反応を計測するためにベネフィットリストを作成します。この過程の協力をしてくれる顧客をアーリーアダプターとして、次の拡大ステージをリードしてもらいます。

④拡大ステージにおける評価

上記図1のマネジメント・サイクルによって四半期ごとに通常の事業計画の評価を行います。

以上の手順は評価システムの構想として提案するもので、今後みなさまと試行を重ねながら完成させていきたいと思っておりますのでご協力をお願いいたします。

本件についてご関心、ご要望がありましたら下記にお問い合わせください。

PMI 日本支部 SDGs 担当(sdgs@pmi-japan.net)